



第 1 号

目 次

巻頭言	場長 西田 総	1
試験場支遣決小録		2
「うしお」の発刊にこよせて	水産部長	3
漁村と増殖	北山 房美	4
場長メモ		5
本県「アサクサノリ」由来記	永山 松雄	6
いか寝き談義	永浜 猛	8
三つの炬火	山本 清内	11
離島雑感	瀬戸口 勇	12
放流魚	上野 茂	15
製造試験の目標	白石 良雄	16
湾内かたくち鰻の動向調査 その1	前田 耕作	21
ある沿岸漁業者の証言	飯野 昭人	22
遠洋漁業部業務概要	松元 光郎	24
場中場外日記	又木・前田・藤田	25
編集後記	又木 勝弘	28

巻 頭 言

場長 西田 稔

鹿児島県立の水産関係の試験・調査・研究・指導機関として6ヶ所に設けられていた、それぞれ独立した水産指導所が統合されて、昨年も押さえた12月1日から水産試験場として再発足しました。試験場と云い、指導所と云い、はたまた研究所と云い、その他の呼び名もあることでしょうか、そしてそれぞれに多少の違う使命が^{もたら}まわされているのでしょうか、大筋はあまり変らないように考えられます。ひとつ云って看板が変わっただけだとすまじむわけには参りません。特に本県の場合は統合された枠組の容れ物となる感じの本館が昨年9月の台風で完全に倒れてしまい、その廃材を使った12坪のバラック・漁具倉庫・製造工場の差しおろし・宿直室などに職員が分散して仕事をやっている状態ですから、不便であり能率も上らない事と思ひます。存えられた経費と設備で従来以上の効果をあげるように努めながら、建物や設備の復興にも取りかゝる覚悟で、一同張打っております。

試験場としてのこの種の機関の使命は一オ水産業界の発展にお役に立つこと、他オ水産行政(狭い意味の)機関に必要な資料を提供することではないかと存じます。後者はもちろん前者のために仕事をしているわけですから、つづめて云えば業界の発展に、お役に立つ事にあると云えましょう。

さて水産業界の現状と前途を考えると、真に多事多端なようです。水産物のうち量販品を占める部分は無盡蔵の時代を過ぎて計画生産を考へる必要があるように成りました。領海100哩だの150哩だの更に領土の中央線だのが論議され、向蹊の李ラインなんか対島のすぐ近くに引かれている状態です。漁獲努力もどんどん進みますので海洋資源のうち特に日本のものに成る資源はこの両方からはさまれて、どうしても計画生産に目標を置かざるを得ないことに成りませう。言葉を換えて云えば、資源時代から生産時代へ成って行くでしょう。これに目標を置けば為すべき事は山ほど有り、現在の特に県水試の経費の規模ではなかなかな荷にあまる事でしょう。

そこで試験場に勤める我々の心構えとしては、自分の環境だけの立場にとらわれることなく、一從云い視野に立って見て、目標や仕事の方法を検討しながら進めて行く必要があります。全^く水産産業の農林畜産業界やその試

試験内容のあり方・方法・結果などは右に参考にするべきであり、場合によつては工鉱業方面にも範とすべきものがあると思います。自己批判と云うことは何もコムニストの専売特許ではありませんまい。3000年昔の孔子・孟子から、「しやが」や「キリスト」の教にも反省が大切な事が云われて居ります。これも意味に多少の違いがあるかも知りませんが、根本は全じじやないかと私は思います。

何しろ路面を造り、レールを敷きながら進む図面ですが、お客様に利用して頂いただけると、町々を通り目的地に向って線が引けるかどうか、真に気がかりになります。関係方面の方々の一層の支援と御便達をお願いする次第であります。

水産試験場沿革史小録

- 明治 36. 4. 1 鹿児島県水産試験場として市山下町黒物産陳列場跡内に設置、沿岸漁業試験、セウロ線の育苗試験及びかつお節の製造試験を開始。
- 明治 39. 4. 1 川辺郡笠沙町小・跡に移転。
- 明治 44. 11. 1 市山下町県庁内に移転。
- 昭和 4. 4. 1 鹿児島県水産試験場大島分場として大島郡古仁屋町に設置、主として大島・沖繩近海に於ける鯉類魚、ミナミノシロイシ試験、洋海魚、さんご、鯉節改良試験、並加工試験を開始。
- 昭和 12. 4. 1 枕崎市蛭子町に移転。
- 昭和 20. 7. 戦災焼失。
- 昭和 20. 7. 鹿児島市水上ケイサツ署内に移転。
- 昭和 20. 8. 終戦により大島分場閉鎖。
- 昭和 24. 10. 1 試験場分場を、西之表・串木野に設置、沿岸漁業試験、沖海増殖試験を開始。
- 昭和 26. 1. 5 試験場分場として笠沙町・志布志町に設置、沿岸漁業試験、製造・増殖試験を開始。
- 昭和 27. 3. 31 鹿児島県水産指導所と名称変更、各分場も水産指導所と名称変更。
- 昭和 30. 12. 1 各水産指導所を鹿児島県水産指導所に統合、鹿児島県水産試験場として発足。

×

×

×

「うしお」の発刊にこよせて

水産部長

県の赤字財政と云う苦しい立場もあって、昨年12月1日を期して水産の試験・調査・指導機関である水産指導所が解消され、新に鹿兒島市に水産試験場を、吉仁屋町にその分場を設置し、国出発したことについて、敬の上では大きなマイナスになった恰好になった事から、関係筋一部の面に於て水産試験場本来の使命遂行の上に支障をきたすのではないかと云うような危惧も抱かれているように思うが、私としてはすくなくともこの機構改革が県政水産の振興の上に劣性にならないよう奮起しなくてはならないことを痛感しているところである。

従来の水産指導所には、一部の人から、と角の批判もあったようである。見方の相違であると云えば、それっきりのことであるが、打続く不況に呻吟する深刻な業界には何か知ら、死中に活を求めたいような切実な要求が心のシコリとなっていることも、伺われることであり、それが、水試に対する大きな期待として懸けられていることも事実であろう。

期待が期待として得られないとき不満があり、今も出、又、批判も起きることであって、新機構のスタートに当って水産試験場の擔う役割も又大きいと云わねばならない。

このような情勢下において、水産試験場が、日常研究し、試験し、調査して得た貴重な資料が基盤となって、この「うしお」を通じて、業者への道しるべともなり、又一ヒントともなる報道がなされるならば、湯に躍す千金の水にも値いすることであり、私は又、それを欲して止まない沢オである。

漁村と増殖

北山 芳美

沿岸漁業の不振の影響が、最近、浅海・内水面を向けて増殖の必要が再認識され、浅草のり・海人草・てん草等海藻類や真珠・鯉・あゆ等の増殖が各地で行われるようになった事は漁村経済自立化から見ても喜ばしい事である。

云うまでもなく増殖事業は戦前から投石・岩面掻破・磯掃除等いろいろなと実施されていたのであるが、その殆どが芽となく、増殖どころか寧ろ知覧久志等の如く逆に荒廃漁場化した所が多かった。

これは介藻類の生活史、増殖の方法が今日に比べて明確されていた、従って、手段・方法がまよつた事と県国の方針も従来他の部門等よりも軽視され、予算的にも貧弱で殊に漁村に於ても関心がなかつた事等が大きな原因と云えよう。近年介藻類の生活史或はその増殖技術は學理的に著しく進歩発達して来ているが、まだまだ不可解とされている点が多いのである。

浅草のりについても先年英国の海藻學者 Drew 氏の糸状体の発見により浅草のり養殖技術は根本から覆えされたような人工採苗と云う劃期的な段階に進展したが、浅草のりに限らず介藻類の生活史はきわめてデリケートであつてその増殖方法も附着層、胞子の発生期、産卵期、栄養塩類、適地、適種等科学的にどのように進展するか予測は出来なない。又、それ程増殖実施については細心の注意が必要である。

県内100余の漁業協同組合は迷つたとおり増殖意欲は昂まつているが大部分は“真珠がよいと真珠を”“馬産介がよいと馬産介を”と云つたように、その土地にならぬ新しい種類を移植しようとする傾向が強いようである。増殖は殊更に新種を移植するよりも量は少くとも従来その土地に生育しているものに保護を加え育成助長することが賢明の策である。

既に各研究・指導機関を利用し充分な基礎的調査をして適地に適種を適期に実施して速かに確實に効果をあげねばならない。

しかし増殖事業は農業と異なりその効果は2〜3年を要するので、各市町村、県協の事業としては経費面に相当な難点があるかと思はれるが兎にも角にも、今日程県及び国の施策に増殖が取上げられた事はかつてない事である

のでこの期を逸せず増殖を実施すべき絶好の時期だと思ふ。

増殖事業は事業主体が漁業協同組合であるが実際の作業は魚礁を除いて大体婦女子の手で出来る場合が多いので地元の経費は少くとも婦人会・青年団等団体の手で容易に出来るのである。

例ば、海人草増殖等の投石を見ると経費は大部分が石材代であるのでこれを組合員一人一人が石を3~5個づゝ持ち寄れば極めて簡単に集石が出来て胎子蒔けも女の手で充分である。

又、魚礁については最近、古船礁からコンクリートブロック礁に遡んで来ているがこれも一度沉説したからと云って慢心してはならない。毎年山石を補充すれば更に効果は大となり恒久性を増していくのであるが、わざわざ投入する経費、日を設けなくても毎日その礁に操業に行く者が一匁づゝの石を持ちて行き投入するようにするならば簡単に増築が出来て行くのである。

要は魚礁も築碁も岩面壊破も組合当局の事業でなく組合員のための事業であるので組合員こそ、協力してやれば経費についても作業についても苦心する事なく簡単に事業が完遂出来ると思ふ。

場 長 ノ 毛

1月6日 金曜日

各部長同行。年始あいさつを兼ねて関係事務打合せのため鹿大水産学部へ。田中先生の所ですでにアイソトープ使用、ノリ生理試験をやっていたので当方立おくれを感じる。(一昨年から考えていたのだが……)

照南丸10時出港。

定点観測と漁業試験、並に製造部の鮮魚の鮮度調査。古仁屋水産学校の実習生も約二週間乗船させる予定。

熊毛にあるヤンマーディーゼルを分場に返すのを一時的に中止、ちどり取り寄る。

技術改良普及の電気及び機械関係について一応の構想を立てる。

委託缶詰製造。

漁体測定。(さば)

×

×

×

次. 7P4

本県“アサクサノリ”由来記

永山 松雄

大正10年頃より鶴の渡来地で有名な米之津町荒崎の野田川尻で、ササヒビによって自家消費程度に細々と続けられて来たアサクサノリ養殖業は、現在発祥の地？米之津で約200万枚、その外今のところは試験の域を脱してはいませんが小規模ながら一応の歩みを見せている鹿児島市甲突川尻・川内川口大浦・谷山・重水・宜富・那治木・敷根合せて20万枚、合計220万枚程度で、事業と云っても他の先進県に比べれば誠に少ない数量ではありますが、兎にも角にもアサクサノリを生産する県としてその末席をけがす事が出来る様になりました。

云うまでもなく何事も一朝にして成るものではありません。これまでに育てあげるについて当業者の方は勿論、所謂縁の下の方持ちとして努力を拂って来られた諸先輩のなみなみならぬ労苦、その業績の跡を辿ってみることも無益ではありませんまい。

今も尚、米之津町野田川の畔に居を構え、このアサクサノリ養殖業に従事して居られる時吉米記氏こそ、実は本県アサクサノリ養殖業の始祖とも云われるべき人なのであります。同氏は当初、野田川尻に於てササヒビによって自家用程度の養殖を行って居られたのであります。

当時（大正11年）鹿児島県水産試験場としてもこれに着目、同氏の協力を得、斯業事業化についての試験を始めたのであります。

試験は当時、養殖係として水産講習所を出た後の新進学窓、今は亡き浜名龜助氏（元札幌水産学校教諭）を迎え、氏の手によって着々と進められ最も原始的なササヒビによる養殖より、現在行はれている組ひび・浮ひびへと進められ、浜名氏が商船水産学校教諭として転出された後もバトンは次々に受け継がれ、遂に事業化の目途を得るに到り、米之津ノリ養殖業の今日ある基礎は成されたのであります。

以来小規模ながら事業は地元業者の手によって承られて来たのであります。加、不幸今次大戦によって元召・徴傭と遂にこの事業を守るべき人手を失い、切角育て上げたこの事業を見捨てざるを得なくなったのであります。

一方浜名氏は国分町、新川尻に着目、米之津に於て種子付後移殖相当規模

の養殖を行い優秀な成績を得、事業化しようとした失先、恰も同地一帯干拓の議起り、切角築きかけた若い学窓の夢はあえなく消えてしまったのであります。

終戦を迎え、復員・引揚げ、人々は忘れられかけたこの仕事に一人＝人といふよりも縁になりました。本県水産試験場も亦同じ先輩が築いてくれたこの基礎のように立ち、鹿児島大学水産学部、田中教授の御支援を得、或は先達県の斯岡機成を招き、及ばず乍ら努力の甲斐あったと申しませうが、ノリ生産県として末席をけがすことが出来る縁になり諸先輩並に先輩若輩氏の御努力・御苦心を無に世中に消んだ？と。―――ともすれば我が世の春を蔽い縁の下の方持ちとして消え去った先輩として其の業績は忘れ勝ちなもの――あえてその足跡を辿った次第。

場長メモ

1月11日 水曜日

10時から議会委員会。

水試験係としては復興の場合の位置、建物の構造、施設などについて現在の構想について水産部長から一応の説明をした。委員会としても準備進行の各段階に於てよく連絡し、協力して立派なものにしたい旨の要望があった。

1月23日 月曜日

米之津及び福岡県のノリ状況を関係者に伝達。

31年度予算財政課の査定結果について各部長と検討、対策を立てる。

大島分場長松田代表場、事務打合せ。(予算特に試験船関係のものと、命令・収入・支出の取扱いについて。)

水産部長、西課長と出張復命並に、1. 歸南丸を3月下旬から4月間屋久島・種子島・鹿児島本土間の海容調査(海容送電関係)に供用することについて。 2. かもめ丸を1月27日～2月5日、大島・瀬戸内を主とする水中撮影その他大駅口ケ隊に供用することについて。 3. 種子島SE近海の黒マス口漁業試験を31年度に取り上げることの可否について。 ストロ中の昨年4月以降の昇給辞令到達、各人に伝達。

いか受き談義

永決 猛

鹿児島には昔から“三ヶ馬鹿”と云う言葉がある。

昔懐かし敵國の拿持ち最良。新米取り最良。次に千両の“いか受り馬鹿”と云う次第である。どうしてこんな言葉が出来たかは各人の想像に任かせるとして、少くとも小ずの海に利口な口を開く人間のことではない。だがこの言葉はどこか向の板けたえなしの無天家達の写りがするのではないか。実際海風いささば海に水っぱす互にうこなから釣れもしないイカを待つ格好はほめられた筈ではないが、この道にするするなりとも入ってしまうと、その楽しさと云ったら俗人の評、何ぞその皮相なやである。

さて、今から何年になるか試験場が札幌にあった頃、現在大島分場長の松田さんと初代照洋丸の枝園長がイカ受きに生計けた。枝園長は自他共に許すイカ受き天狗。松田さんときたら素人以前の脱走。あの松田さんが私のところに「イカエギ」を貸して呉れと云って来た時は内心「ミゼタ」と思ったものである。そして彼が遠征の瀬でもびりーけて釣ることと予想し、しぶしぶ貸したものだ。ところがである、予想は完全に裏切られ、松田さんは大漁、枝園長漁絶無と云う珍妙な結果になってしまった。松田さんとしては序の口の腕前で横綱を扱げとばしたような感激であっただろう。こうゆうような結果はイカ受きにはよく現われるものである。この事は素人の持っている「エギ」が当夜の潮（透明度・水温）月・時・雲量、即ち天然現象とたまたま一致した時ではなからうかと思う。

勿論私の持っていたエギは私の秘蔵予を貸したのである。

イカ受きの材料は昔からやむなく云われていだが材質としては楠・クサギ・アマギ・タラ・カンラン・桐等がよく使われているようである。この材木を自己の腕にヨリを付けて陸地の尺程のあるものを作り上げる事が並通であるが、零門家に作って貰う場合もある。中には仲々凝ったものかあってエギの目は純金・サンゴを持って作ってあるエギを見た事がある。これなんかはお隠秘趣味に属するもので舟の中に火鉢を持ち込んでキンタマ火鉢でもって悠遊としたなむ部類に属する。

内湾では主として水イカ（アオリイカ）を対象とするが、マイカ（コメシ

メ）・馬康イカもかなり多い。たまに魚(たまみ)やたこに食いつかれることがあるが、たこや魚に食いつかれるようなエギは全くもってエギとしての命運加につきるもので一級品として遇してさしつかえない。右の武士加刀剣を受する加ごとく、茶人が茶酌を云々する加如く楽道家達のエギに対する執着は又強いものがある。

昭和14.5年だったろうか、私の手に一ツのエギが手に入った事があった。格好といふ材質といふ、おいぶん気に入ったものであったが、或る仲間がどうしても欲しいと云うのでオタ探しまわった挙句、このエギの同質の素材が坊泊の「ヒラサキ」の某漁師のもとにある事が判明した。それ行けと云うので二人して彼を尋ねて懇請したところ、いとも易々と入手出来た。大枚10円であった。その頃の10円であるから今の一体いくら位になるであろうか、往復の車賃や糸当代を合せてみると決して当時としては安い金額ではなかったようである。ところがである、魚の首でも取ったような気持ちで二人して家に帰って、その素質を削り火に焼いて水につけてみた(こうして品質を検べる)やんぬるかなニセ物を掴まされていることがわかったのである。当時仲間の憤慨すざましきものであったが10数年経った今日からふり返ってみるとクスリッと笑いたい懐かしさを覚えたものである。

誰でも知っているとおりイカの足は10本でありそのうち2本の足が特別長い。ところがイカを釣り上げるときよく見ると釣り上げられた足は皆同じ長さになっている。2本の足は獲物を攻撃するとき伸びるらしい。2本が伸縮自在になっていたゴムみたいになっているところがおもしろい。エギが上等であればいきなり食いつくが、エギが下等であれば半信半疑を起すのが釣り上げられたイカが2本足だけひっかけられて掬ってくる。そして又、自分よりも巨大な獲物に向って敢然と抱きつくイカの廟魂も面白い。

湾内での時期は8月(旧暦)の花イカより始まる。「花イカ」とは花ビラのように小さく可愛いからと漁師は云う。そして盛漁期は10・11・12月、2月(全べて旧暦)頃迄続くのである。

次は漁場選定であるが、これを漁師は「コセ」と云っている。漁場が悪いと云うことをコセが悪いと云う。湾内漁場は五位野沖から谷山海岸に至る線、天保山沖や、神瀬は特に良い。それに海潟沖がある。

これらの漁場はやはり海底が起伏に富むが瀬があるかである。イカは外敵

におそわれるのと自から攻撃する場合の有利性を保つため、深きわりによく泳いでいる。従ってイカ釣りをする場合はその深のまわりを浅くはけならぬ。昔から「イカの目の見えること8間」と云われているように浅く離れること8間の所を潜いで行けば食いつく筈である。それから「浅くには釣れぬ」と云う言葉があってどく上等のエギを持って行ってもこの深きわには絶対に食われない。善通港の港子の中間より干潮に向う浅瀬の所によく食うようである。

よく素人の方にイカ釣きにつれて行くと云われるが、釣を吹きつけられるから嫌いである。いゝエギを持ってだまたま釣れるとすのこい足の踏むところを知らず「タコバ」おどりをやらねしてしまふので、人間はおうか舟の中はすみで真黒になって、気持の悪いこと、いゝたら話にはなうない。すみを吹きつけられない秘訣はイカが海面に出た時、頭を掴むこと、船中に入れた時腹を上に向けることである。

イカ釣の絶好のチャンスはサビサビ地で行われるような月夜、キロエゴが海岸に押し寄せて来るのを見つうかまをぬくイカの群に出食わす時である。こんな時は答えられない話の長款を待つものである。しかしこんな時機到来はめったにない。幸や私もこゝ二週間は自分も釣しではある。

完

場長メモ

1月26日 木曜日

パパイヤ鑑別試作について大山正伸他1名来場。

復興対策委員会、佐藤から、第1会議室で

中本野の風景金庫及び実験室を電波管理庁関係の事務室に貸付方について市長・市議長・地元源場長から要望あり。(水産部長室で面談)

同所事務室は海上警察庁関係に、宿舎は県土木部の出先関係に貸与、又は転用することになるだろう。

二つの炬火

山本清内

水産試験場の使命とする所は、昔も今も変わらないし、又変るべきものではない。すなわち調査に研究に指導することである。が、その内容や、その時代的意義や、その実践の方途となると必ずしも明らかではないし、後世代にも渡つて不変なものでもあるまい。

例えば幾たびもの忍耐強い、綿密な調査に依つて、漸く浮き彫りにされて来た実態も、只、それだけのものとして資料棚や統計表の蔭に眠っていたのでは甲斐無きものであろうし、日夜営々として積み重ねられて来た研究の成果も、実験室内に冷凍されたまゝで孤立していたのでは効果が少ないし、研究者の研究意欲も萎けらぬであらう。即ち観察し、実験し、推理する等によつて確かめられた事實は、生産と分配の面に於て採り用いられるべき知恵と技術とを供給する源泉ともなり源泉ともなるであらうか、それらの知と技とが、人間生活の向上と社会の福祉の増進とに對して、如何にすれば、最も有効適切に結びつき得るかの考へと工夫との無いところからは、逆におのり堅かなる成果は期しがたいのではないか。それは行政にまつてゐる者の任務であるかも知れない。が、知と技やの調査・研究の枠内にうつくまつたままの所謂行政の**驕慢**に甘んじているのみであるならば、所謂の調査・研究も遂に大地に落ちる事なき一粒の麥たるに止まるであらう。技と知とは行政に結びつき、その指針となり、逆に、それを牛耳らなければならぬ。これが技術者たるべきものゝ志向すべきオ一の炬火である。

しかし、かくあるためには調査に熱意がこもり研究意欲が熾盛でなければならぬ。眞に実力ある研究者のみが權威ある発言をなし得るのである。これがオ二の炬火である。しかも、このオ二の炬火に点火されるためには、調査の自主性を確保すると共に、財政機構の面に於ける改善と保証とがなければならぬ。而して、この事は水産試験場と云ふものの外、その対象が海洋であることからして、国の運営する機関の一つとして、広い、組織的な機構の一環となる事に依つて始めて可能となる。これがオ三の炬火である。

而して、これら三つの炬火は、何れも個々別々に独立して、点火されるべきものではなく、三者が相互にからみ合い、所謂、三位一体となす、燃えさかる炬火として、燃えあがるとき新しい人間の世紀にふさわしい、よりよき技術を生れて来るのである。

(筆者 鹿大水産学部長)

一昨日昨夜暗だったか、頂上には白い雪をおろって薩摩富士の名に恥じない秀麗な阿南岳が望見され、一時放心状態となっていたのは、寒潮の影響を直接受けて温暖なこゝ熊本地方では冬景色を眼の当りに見るのは夢物語のようで、子供らの雪に戯れる姿は到底見ることが出来ない。と云っても寒波は容赦なく吹きつけ、杣行李の底にしまい込んでいた冬オーバーを情てと取出し、ナフタリン臭いのを着用し始めた。しかも支庁内で火鉢を使い始めたのはつい近日のごと、温暖なことを身上と信じて、今年の寒さはたいていした事はないと小馬鹿にしていたのは、全く見当違いであつたような昨今である。

毎年のことながら年の初めともなればなんとなくスッパリした気分となり、過ぎ去った1年の試に逆みつけた事を嘉諾し、新しい暦の1頁めくりながら360枚の運勢を拝念するのであるが、30年こそ試に、辛な年で衰亡の感一入である。昭和29年10月水産試験場早本野分場が発足し、29年10月北薩水産指導所として改称され、30年12月県水産試験場として発展的解消をみるまで6ヶ年余、月間文字通り揺籃から息場まで早本野で過して来たものが、全く未知の世界、そして制度の転変策として熊手に転任したのである。

本県の機構改革が具体化し始めたのは昨年9月頃だったかと記憶する。或はそれ以前だったかも知れないが、とにかく6ヶ所にある水産指導所の存在の功罪が益處なく問がされ、社畜々員の間でも相当ザスカスかなされたのは事実であつたろう。我々は大部分の水産指導所の存置運動がなされた事も知っているが、これは純粋な立場から、その地域的特性を生かす水産業発展のためにどうしても必要であると言った面で検討され、大きな世論にまで展開されたであらうが、指導所があることによって経済的な利益があると言う打算的な運動は微塵もなかつたと断言できるだろうか。29年度決算見込額で10億6千8万円にも達すると云う大きな赤字を背負いこんでいる本県の財政状態からして、機構改革は理の当然であつたかも知れない。しかし、今まで歩いて来た本県の水試験研究乃至は指導機関が充分満足すべきものでなかった事は否定出来ないことであらう。ある人は地方

水試は県営水産会社に名称変えた方がよいとまで極論しているが、これを反駁するだけのしっかりした根拠を持合せていたであらうか。地方自治体は、このような持論をもつのは、この対象とする産業の進歩発展を計り、あわせて行政上の指針となし、参考とするための資料を提供するものであると確信したのであるか、この点からしても水産試験場（指導所）は如何程までに寄与したろうか。今后、本県に於ける水産業の實態から水産に関する試験・調査・指導機関は如何にあるべきかは、相当論議され、よりよく向上して行くと思うが、こゝで我々は冷静に考え、旧來の惰性をいさぎよく改新するの雅量を持ちたいものである。いづれにしても虚心胆懷に反省し、將來への発展に基盤をおく絶好の機会であることを想起すべきではなからうか。

水産試験場として一本に差化整理されながら新しい駐在設置の制度は注目すべき事と思うが、どこに存在理由を見出すか当惑者として一オウ惑っている恰好である。聘任を命ぜられた以上確固たる信念を持って推進して行き、生半可なことは許さるべきでないとはよく認識はしている。なにせ初めての制度、テストケースとしての我々の活動は責任の重大さを痛感し最善の努力をいたしたいが、私一人としては次のように解釈しているが如何なものであらうか。

師範、遊離し勝ちで予算消費の大きい離島に於て、その地方にマッチした試験・調査・指導を継続・強化すること、及び行政機関に配置換えした場合有用な人材に養成することの二つに帰結されよう。軍なるか飾りもの・剰余人員の配置場所、本場或いは行政課の連絡機関とは考えたくない。又、これのみでは全然有益どころかむしろ有害な事象さえ生ずると思う。

ところで、熊本県内の水産業の實態につき、短期間で手元にある資料だけを通覧すると現在のわか国漁業の特徴を端的に表現し、しかも漁家層が極めて大きなウェイトを示し、今后漁業政策の中心となろうとしている。中小企業は全く振わぬ、漁家層の青壮年が雇傭さるべき資本漁業——遠洋漁業——は全然ない貧弱さであって、大多数を占める漁家層のものは、益々強く零細な沿岸漁業に執着せざるを得ない矛盾にみちたものとなつてゐるよである。

そして又本県の特異性は大きな消費市場を持たないので魚価が安定していない。反面島内の蛋白資源は供給しきれず相当本土から移入されている。漁業の多くは極く沿岸の小規模な網又は一本釣の拙き生産性の低いものに強く

依存している。重要資源の漁期は全く短期間の産卵期に限定されている。好漁場がごく沿岸に形成されるため機動的な中小漁業の操業により相当零細漁家は圧迫される。陸上の特産物が多く換金作物として利潤の多いことから兼業としている農業に相当の資本が逃避する。又必然的に浅海の根付資源の保護、増殖対策が完璧でない等が気付かれるのである。

水産試験場が駐在はその地方々々に於ける現段階の水産業を基盤としなければ進上った存在にならぬのではないかと云う見地から、上述の如き軽率な進断になつてしまったが、前述したような方向で、どんな進み方最善であるか、非常に難問である。只、なるべく速やかに熊本地方に於ける水産業の個性をはっきり掴み、そして各地先に有用な資源の基礎的な試験・研究を行うと同時に当業者の中へ直接溶け込み、技術の改善・指導に努め、行政分野の事務にも精通したいと悲願している。

しかしながら、これには、例えば浅海増殖の面からでも、地理的に亜熱帯部に位置し多くの種族が蕃殖している中で、単一群の顕著な効果を達成できるか、好対象とされているマクリでもすでに漁獲量の増進にまで増殖法が安定し適正であるのか、特産物でもあるトコブシの生態はどうなのか多面的な技術を身につけて指導する立場にあるものとして充分であるか、水産業は応用科学であるものに鋭意打込まねば難澁した現象の解明は出来るものでないのか、或は、行政事務をす早く処理するに必要な法規に精通するのは二又かけているようでは到底出来ないとか幾多の批判はあると思う。事実浅学非才で対人交渉の下手なしかも京大退却でさえある私のこと、使命の達成など、以ての外で、自信・自惚さうさらない。

距離上からみればつく国と隣の近くであるが、同化でも続くと週回位はすぐ交通遮断されるところで、すぐ海峡に流れぬいかん夫にとって、刺戟が主で、漁業の系になることが恐ろしいのである。各位の御教示・御修正を感謝するのみです。

(筆者 熊本駐在)

29年の暮に島根県境から突然、漁具商の方が見え、今回は商売気を離れ技術啓蒙に終始したいとのことだったので、安能及び一本釣の腹肺講師に成って貰うことになった。お正月を目前に控えた忙しさで懸念されなれどもなかったが、各地共相当の人が集って強い感銘を与えた様で、北薩水産指導所でも見本として撈獲の漁具を一部購入した。

30年の11月、かつて受講した地域を訪れる機会があったので、その後の改良漁具の使用状況を聞いてみると即ち中絶しているとのことと黙して語らなかつたことがある。実は入手した漁具が如何に地元に適する様に改良・工夫されたか、自慢話の一顧を拜聴する心組でいたのだが……。

豊作・貧乏、太漁・貧乏とよくいわれる。特に根付漁族に改良漁具を集中的に使用すれば資源の枯渇を来たすことは予想に難くない。しかし机上で空論の回転を続けただけ始まらない。とにかく獲らねば漁家の釜は煮立たないのである、生産者はアナタ委せで安く買い叩かれ、消費者は高い魚を食されている現状を矢代嘉春代は漁撈あつて経営なしと表現しておられる。流通過程の改善こそ政治的に或いは行政的に解決を図らなければならない漁民の問題であろう。

それにしては進歩した漁具を吾がものにする努力（言葉をかえて云えば生活権）をいとも簡単に放棄する漁業者の環境と云うか気持は解せない。解せない方がバヤリ言葉のガイローゼなんだろうか。

製造試験の目標

白石 良雄

数多、広範に亘る水産製造で本場の命令は「基礎技術」の把握のみである。時代の推移とともに盛衰の起因を考へるときその製造技術が單なる真似や「しきたり」によつてなされるものは衰頹し、後には関心すら抱かれなくなってしまう。惜むらくは、かくの如く餘りに速く静められ、かえりみられないことである。

「基礎技術」とは物理・化学の応用に基づく術(わざ)をいうのであつて、我々の製造はこの「基礎技術」に依ること実に著しい。「基礎技術」は試験で経過を明かにし、実験によつて結果を客観的に批判し、検討を加へることによつて生れるのである。どんな特殊な製造であつても、試験に並行した実験から割り出されたものでなれば「空中の回轉」と同様に實に「基礎技術」こそは製造発展の根本である。

仍て「基礎技術」を把握する手段として、次の「試験」と「実験」を行うのである。

1. 水産物の油焼防止試験
2. 乾燥機械の性能・乾燥條件の適否試験
3. 輸出金詰並新包装魚製造試験
4. 水産化学の実験
5. 低温利用試験

一 油 焼 防 止 試 験

水産製品の油焼が水産加工技術の害とされているのは、これが如何に厄介極まるものであるか加判る。油焼を免がれる技術手段として製造の操作を取沙汰するのは意義がないと思う。このことは製造系料流を生化学的方面から考え直すことによつてはつきり云われるからである。

思うに、防酸化・酸化抑制の方途は單純な製造工程の場合にあつても、まだ創意を加へるべきものの加沢山残されている。

例えば塩乾製品の製造のとき、塩漬操作を如何にすれば酸化防止に役立つか。

果して、

1. 金属成分が合理的に一致した効果か如何あるか。
2. 湯液に抽出する可溶性成分(？)は幾何の濃度と有する塩類に最大の抽出量を示すか。
3. 又、最大抽出量には幾何の抽出時間を必要とするか。
4. 抽出する可溶性成分(？)は製法の出来栄を以てに魚体油に關係はないか。
5. 用塩の等級・種類によって食塩濃度を、抽出量に幾何の差異を現わすか。
6. 用塩の種類・等級によって抽出塩類に幾何の差異を現わすか。

これらの問題を具体的に調べあげれば「もつ油」の真面目は近くなる筈である。加之前記が生んだ薬品として、サステン・リントンの硫酸化剤が現われ、これをして、多くの課題を与えるところとなっている。今これらの薬品には絶対的効能等(？)を以てて表示されている。

サステンは従来抽出薬品に使用されて、抽出場面に幾分か効果を現しているが、今までのところ食用油(種油・生油等)に於いて効果が多いため、魚油に於いては試験結果で未だ効果が不明である。即ちサステンは油類だけに効き、この油類抽出に幾分か効果をもつものになうと期待されているが、下記の試験結果で既述の通り結果を現している。即ちこの場合と同一ように試験(抽出量等)をされて行くから、この場合の抽出に幾分か効果がある(抽出量等のもの)ものには効果が現れているが、この場合の抽出(抽出量等)は既述の通り結果を現している。即ちこの場合と同一ように試験(抽出量等)をされて行くから、この場合の抽出に幾分か効果がある(抽出量等のもの)ものには効果が現れている。

抽出量を大きくすることによって抽出量が大きくなるのであるから、

1. サステンの抽出は抽出に幾分か効果があるか。
2. サステンの抽出は抽出に幾分か効果があるか。
3. サステンの抽出は抽出に幾分か効果があるか。

サステン抽出を抽出に幾分か効果があるか。

魚体に吸収され易くする操作に矛盾はないか、即ち魚肉蛋白質に渗透すると云われるか煮熱（又は塩漬）により凝固した蛋白質にも凝固未熟の蛋白質と変らず渗透性があるかである。

尚、伸べて考へれば、

- I. 薬液に原料を浸漬してなおこの薬液を加圧すれば魚体内に薬液は迅速に渗透しないか、この物理的操作は不可能か、（サステンの場合も同じである）
- II. 乾製品の場合乾燥度に幾可の着異を生ずるか、（サステンの場合も同じである）
- III. サステンと併用した場合、相乗的效果は幾何なるか。

云々は全て基礎技術の分野かも知れないが、数多い原料魚種、品種に亘ればなほざりに出来ない要訣が得られるのである。

二 乾燥機械の性能並

乾燥條件を把握する試験

水産製品の30%を占める乾製品に関係者は殆んど機械的乾燥に注目を持つようになった。従来製造に用いられる乾燥機械は餘りに規模が大きく、しかも特定の専業に限られたのであるが最近漸く一般乾製品に認められるものが逐次出現している。

「如何なる乾燥機と云えども自然の天日乾燥に勝るものなし」と今迄考えていたものが段々に考えを新たにするようになったので、今乾燥機械の過渡期と思う。

乾燥は被乾物の水分を空気に容出させるのが原理である。空気はそれ自体に持っている湿気が少い程被乾燥物から水分を吸収し易いのは当然すぎることである。

乾燥機械はこの原理を機械的になすのであって、自然乾燥（天日乾燥）よりも能率上、又、乾了品質上遙かに勝れていなくてはならないのである。現在名をなしている乾燥機械（機械及設備費は別として）はみな原理を十分に活用するように加湿・通気・除湿等の調節が自由になる機構を備えている。

乾燥機械を求める者は先づ乾燥原理に立脚した応用物理に通ずるところがなくてはならない。

1. 今日の大気温度はいくらあつて、その湿度はいくらである。この空気を温度何度に上げればその湿度はいくらに下るか。

2. 温度を上げて湿度が下った空気を乾燥室へ送るのに送風力が必要か、風がくまなく行き渡るのに風速をいくらにするか。

3. 乾燥室内の被乾物の水分は何%含有しているから、全水分量は何kgである。この水分の何kgを何時間の間に空気に吸収させるには毎分幾何の空気を必要とするか。

矢張りこの三問が答えられぬとあれば、一点非のつけどころのない乾燥機械と云えどもロボット取扱者に奪ねられているものと同報である。

乾燥条件とは被乾物の特異性を傷つけないで乾燥能率をあげる経済上の要要素である。

乾燥原理を解し乾燥機械を従横に活用するとならば乾燥条件は被乾物の特異性が命なしになつてしまふ能率の損失になつては、得違ひで通らずである。

乾燥条件は製造施設によつて、乾燥室内の湿度・温度・風速の三つに規定せらるべきであらう。これをよく守ることである。平たくて云はば、魚を乾燥の場合には、世間の湿度、温度は何度・何%、風速は何m/sec、乾燥室内の内部拡散をどうしている等々と乾燥の要点を把握せねばならぬのである。従つて型式は違ふでも乾燥条件が合致した状態が乾燥室に入る。機械そのものは他の型式でありなかつた。乾了の成績には差があるがよいのである。

過去水産製造に乾燥機械を採用して失敗の要因を述べた箇々の場合は、乾燥原理と乾燥条件の会得が把握がなされていなかったのが原因である。

重ねて同じ事をいへば、如何なる理由をもつて温度を上げるのか、何故ために送風するのか、何故被乾物は乾了するまで乾燥室内に入れる必要はないのか（特別の場合を除き）。最後は数値公式の分解によつて答とならねばならぬ。実に「乾燥原理」と「乾燥条件」に徹しはじめて乾燥記録は更新されるのである。

三 輸出金詰並新包装魚製造試験

現在輸出金詰は鯉・鰯類・鰻など外貨獲得と云う国際的意義をもつているのであるが、需要国は尚他の魚類金詰にも要望を持っているのである。即

ち醃類と醃漬に考へられ各條がこれにあって、この醃漬法は過去の失敗を全
部ないから醃漬法に認む、し、さらに所製品の製造を促したものである。

塩酸化セロハン紙、ポリエチレンフィルム（共に食品の包むる包装用紙に
てなく可成り容器（形にとらわれない自由形の容器）としての用途が著しい）
のである。

缶詰のように内容物は全部露食が出来、栄養に富み、且ち長期保存の利く
魚介製品はのやわらかいだろうが、包紙（包布）は透明であるから内容の如何
によつて視覚が製品の良否を大さく左右するところに製造技術上（又食糧価
値上）一長一短があるわけである。製品として見栄は悪いが味など食味に申
分ないだけではこれを新製品として江湖にひろうことは非常に困難である
からあくまで視覚本位が大事である。見栄の悪い製品でも仕方のないが本當に
もたぬく露食出来ること、優良と経済上の優点がわかるから、この種の貯
藏性の醃漬は包紙（包布）ものが近所件（？）をもらさぬ、且ち可成りの性
状をもらてゐるから、たゞ、材料関係に技術上の課題があるといふことである。

四、水漬法、醃漬の失敗

一般に水漬法の失敗は原因は多岐に亘る（知るものゝ限り）が、この失敗
は主として、全量に可成りのある醃漬と、醃漬の失敗である。

この失敗が原因となつて「醃漬失敗」の失敗が、醃漬の失敗は常
動的に可成り、醃漬、醃漬の下の方から醃漬と醃漬するから、

次は醃漬として醃漬と醃漬を辨つてゐる事項である。

1. A.P.Fのこと
2. 原料醃漬の生化学のこと
3. 醃漬測定のこと
4. 水漬のこと

五、低温利用試験

金製造試験の一端として忽せに生来ないのは、この低温利用試験にして、
その利用点には物理的研究態度を失われ試験を是とする外何物もない。---

---省略---

×

×

×

湾内かたくち鯧動向調査 その1

前田 耕作

かたくち鯧は煮乾として優秀な物であるが、鹿児島県ではそれ以上に鯧餌料として重要視されていることは周知の事である。このかたくち鯧の外に鯧餌料としては小物のま鯧が使用されているが、これは漁期が短期間であり賃的にも落ちるようである。鯧漁業に活餌を使う以上かたくち鯧と鯧漁業とは不可分の関係にあってかたくち鯧の消長は鯧漁業の盛衰に大きな影響を与えるのである。

ところがこの貴重なかたくち鯧が近年次第に減る傾向にあって八田細漁業者並に鯧漁業者に不安を抱かせている。

従来このかたくち鯧は移動範囲が狭く鹿児島湾内のものは湾内限りに生活しているものと云う説が強かったが又その反対の説もあり、産卵期や産卵場所についても色々の説があって纏つておらず、尚どの説を聞いても根拠のあるものでなく、何れも只陸からの推定の様である。この様に不明の事ばかりであるから資源量等の推定も出来ない儘に漁獲多ければ八田細の操業統数が増え、少ければ減ると云う具合で確たる基礎の上に立った漁業が出来ないのである。又光力にしても県で制限してあるにも拘らず各自がばうばう自分に有利な主張をしておるが、これを調整する方でもどれが正しい主張であるか判らないので困却すると云った状況である。

この様なことから水産試験場では鹿大と一緒に一昨年からかたくち鯧の調査を始めたところ色々珍しい事や変わった事が見られているが海の事であり一朝一夕に結論は出し得ないのでこの調査は将来長く続けなければ効果の挙らない事であり、又勿論どれだけの効果を挙げ得るか未知数である。尚試験船一隻の調査資料ではいろいろ不十分な点があるので業者・各位の資料の提供等御協力をお願いせねばならないと思う。

一ケ年の調査経過については次号で述べることにする。

×

×

×

ある沿岸漁業者からの注文

飯野 昭人

Y…… 水産試験場の一職員

K…… 一沿岸漁業者

Y 今日は、お忙しいでせう。遊びに参りました。

K やあー、どうぞごゆっくり。

Y 早速ですが、今度の試験場の整理綜合について、どうお考えになりますか、お伺いしたいのですが。

K そうですね。私はお、4、5年前からこの問題については構想を持っていたしましてね。「県水産試験場機構改革について」と言う案を作ってみたんですよ。

Y 先見の明があったわけですね。その案について少しお聞かせ願えませんか。

K いや、私の考えていたのと大所小異ですよ。しかし「人」がどうも――

Y と云うと場員の刷新と云うことですか。

K 今の方々が悪いと云うのではないですよ。私はね、水産庁あたりから――手近かに居れば幸いですが――行政的手腕のある人を一名でも、又部長にせめて一名でも水産研究所の大学をたりから卒業肌の人――こう云うと證據があるかもしれません――をお呼びできたらと考えていました。要するに部下に対する良き指導者ですよ。

Y あいそうですが、まあ不満な点もあるでしょうが、これは色々な点でやむを得ない問題だと思えますので、ここで一つこれからの試験場の進め方と云うようなことについて、一沿岸漁業者として今後試験場はこう云う点に力をいれてやって貰いたいと云うような、御要望なり御意見を伺いたいと思います。どうぞ。

K 貴方は今回の総合合が何政行われたか、と云うことについてどうお考えになりますか。

Y 赤字財政克服。

K それは勿論ですがね、全部の指導所がそうだとはいえませんが、今までの指導所によってその管内の漁民がどの位の恩恵を受けたか、と云うことが最も大きな問題だろうと思えますね。総合したところで財政面はそう大して変わらないんじゃないですか。――指導所の予算と云うのはくわしく存じませんが、――そうでないとそれは漁業者としても今後の発展を阻んでみているわけがありませんよ。そうでしょう。漁協の方面にしても、只今に就くことばかりに専念しては、例えば一本釣りにしてもエサの問題、又漁場による魚群の調査をしてそこに漁船を誘導していくとか、或はスリの洄游の問題など上げればいろいろ多くの研究を遂げる仕事はあったと思えますね。

一水産会社に等しいと云われるのも無理ない話ですよ。

Y 漁場としては予算を課せられていましてね、充分な研究増進も出来なく非常に遺憾に思っ

ています。

K しかに入予備がなかったから研究がまだかったと云うのは納得出来ませんよ。アバウトでも漁業でも延縄でもその漁業をやリながら漁具漁法の工夫は出来ると思うんですが、それでない結果が出来ず漁業者に普及する云々ということにすればよいのです。指導者でついていた漁具漁法一般の漁業者と同じものだったんでしょ。失敗かも知れませんが、かえって漁業者の方から教えられるというような状態ではなかったんですか。

Y 残念ながら確かにそうだったかも知れませんが、次に製造方面については如何でしょうか。

K 缶詰なんかも通って販売していたようですが-----。

Y え、やはり入りの関係で-----。

K 試験場で販売までして金儲けしなければならぬと云うのは、どうかと思えますね。漁獲でも製造、増殖でも、漁民の金儲けを考へてやらなければ、即ち漁民大家の生活向上です。そういうふうを考えれば自から試験場でやるべき仕事と云うものは決まると思うんですがね。

カマボコ・アゲモノ・魚肉ソーセージなどの素材魚の研究、-----これは出来るだけ優良な魚を使用するのが最もよいわけですが、そうしたら高く売らなければ採算がとれない。従って安くしておいしなもの、そして製品がきれいでなければどう高いものを作っても売れないです。——も、して欲しいですね。他魚とか魚干品、その他市販されているものについても研究の余地があると思います。なんでもそうですか。試験場で研究し、いゝ結果が出来たものは実地に移さなければ、只、研究業績だけ山ほど積んでも水産の振興には少しもプラスにはなりませんよ。

Y それでは、増殖関係は如何でしょうか。近い将来にやっていると云うのですか。

K そうですね。沿岸漁業が衰微して来たため、近海漁と云うことに漁民もようやく目覚めて来たところですね。はまぐしの場合がわかりませんが漁民は一般に金と云う夢が有りましてね。近海漁と云うようなミミシイ仕事は好まなかったんですよ。

最近浅草ノリとか、マクリ、ラングサ、アサリ、ハマグリ、イセエビなどいろいろな殻類が各地で行われており、又、今までも近海行われたと聞きますが、その結果はどうですか。浅草ノリは大したものですね。しかしその他については良かったとも、悪かったとも聞きません。——そうすぐに好結果を期待するのも無理でしょうが、——悪かったら悪かったで、その原因も研究すべきでしょう。生かす対象物そのものについてのいろいろな研究とか、産卵の否か、などの基礎的な研究調査をしてそれから初めて実施するべきでしょうね。近海でも長崎でも佐賀でも現在生産・増殖している場所の増殖に力を入れて指導して欲しいと思います。次に、まだ利用地への移殖、又、ナマコ・ウニ・クルマエビ・イセエビ・タコなどの増殖も考えられるのではないのでしょうか。

Y 大分時間も長くなりましたが、その他何かありませんか。

K そうですね。漁民青年育成指導のため講習所の開設なども望まれていますが、講習所と云うようなものでなくとも大学あたりの気海実習のように漁業技術の指導をやったら如何でしょう。現

るに成成漁業の実態に即した。又、漁民の経済力を支えるなどでもおこなふべき問題から
取上げて計画し実行してもらいたい。そうなくては漁民とのつながりなどあらうはずがないし、
試験場など有っても無くてもよいと云うことになると思います。

Y 承の方からも漁民の皆さんにお願したいこともあります。マ、次の機会にでも-----。

K とりとめのない、おぼつけない話でしたが、今後の仕事の上に於て貴方の参考になれば幸いです。

Y お忙しいところ、長いこといろいろ有益な話を有りかとうございました。これから漁業取組
も大いに反省し、漁民のオクに愛される試験場にするため一生懸命頑張りたいと思います。

(31年1月15日 記)

遠洋漁業部業務報告

松元記

1. 対象暖流海洋観測 (1月分)

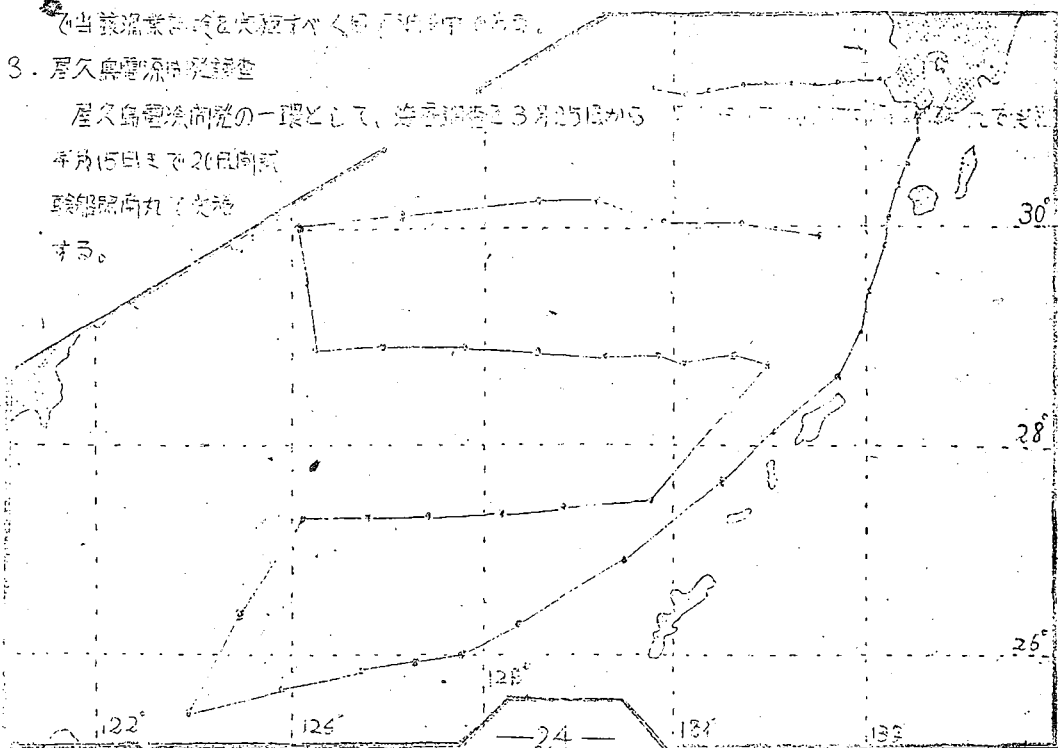
1月6日から1月29日まで20日間、試験船船体(13.93トン、300平方)により予記(図参照)
定航観測となおこの観測に併行して、1月8日から15日まで大島郡古座屋高校生徒の当
該観測を実施した。尚当該観測については整理中につき次回報告する。

2. まぐろ延縄漁具の作製

まぐろ延縄漁具410鉢(網糸160鉢・クレモテ250鉢)を新規作製の上、来る4月以降南方海域
で当該漁業試験を実施すべく準備中である。

3. 屋久島電流観測調査

屋久島電流観測の一環として、昨年12月23日25日から
年月15日まで20日間試
験船船体にて実施
する。



場中場外日記

その1

“ちど”り丸日記

又木 記

1月6日～8日

ちど”り丸ドック、場所 麻児島港

御用初め式後、直ちに造船会社と交渉す。

船底塗料として「ミドリペイント」を使用、船体の「緑色」は魚群が野もどえう。折を見て本係全員でもって「魚群と色彩について」を一応マスターする必要ありと思う。

1月13日～21日

さば標識漁流 場所 屋久島近海

13日

麻児島港を、おきまりの如く佐多岬を通過するころより風波高し、風波をおかして操業するもサバは見合せ、ただ集魚灯のまわりをサヨリちうつくのみ、一湾港に避泊。

14日

一湾漁場訪問、地元船の動向を調査す。

総獲27、昨年は1月15日よりボッボ、涌ありて20日頃相当の涌ありたるも本年はかくの如き天候なれば見合せているところだと言う。総体的に漁期遅れるとの声あり。

5時40分出港、30～40分餌付良好、月昇る頃漁あり。あとばったり絶えてしまう。潮流頗る早し。あと涌まうたくなし。ヤンぬるかな。

15日

強風のため安房港に避泊。

16日

15時50分安房港を、一湾沖で操業漁獲162、尾鰭に金属の輪(標識)のはめ込み作業。簡単なようでなかなか難かしい。こうを先途とあればまくる魚、やうとはめこんで再び海中に放り込む時ある種の辛結感あり。

17日～19日

強風、ラジオ「注意報」を登する。冬の海は全くしやくにされる。午後全員協議20日21日の両日を本航海の勝負とすることにする。なんとなれば、西日殿も「潮」よきためなり。當村専用港の港に碇留、署専用船果丸、屋久島の積込みのため入港、そのために専用港を避けられる。煩悩りは憂さもの。

20日

準備万端登り勇躍漁場に向う。潮やよしと南進甲板員(彼は潮気象判断のエキスパートである)断定す。約40分間漁あり、以後食いつかぬ。民間船多数が漁するも漁場は標識、点々と漁場を移動するを見る。「潮変わり」と南進甲板員云う。又、「にどりまふ」と、この頃より風波強し、民間船ぞくぞ

くと避難す。全員集合を命じ、船長、南進の意見を徴す、「気象回復の見込みなし」と断じ帰港と決定す。

27日

種子島近海メカ釣を計画、調査買肥後乗船。熊毛の川上と共同試験をなすため本日出発す。

×

×

×

その2

“増殖部メモ”

前田記

12月20日

前々日より始っている黒蝶貝の模板を堀口氏(三重県)続行、大量養殖の佐多・牛根方共に相談のため、満尾・堀口氏の顔は明るい。

21日

黒木・佐多漁協長黒蝶貝の事で来場。森始良漁協長ササゲを持参。種付け不良と見えるが調査して貰いたいとの事。明るい黒蝶貝に比べて今年のササゲは発芽が悪く頭が痛い。

22日

水産部長・水産課長黒蝶貝模板視察に来場。

24日

試験場及び各地組合分の黒蝶貝の模板作業をなす。試験場及び大泊方は大体良好であったが、投入水その他管理を入念にこななかった。組合は採算割であった。一考を要することだ。

26日

セロ回目ササゲサノリ摘採、本年度は建込場所が川口を離れているためサノリが硬いようだ。尚11月のサノリが分のためか青が伸びて来た。不眠の注意が必要と痛感させられる。尚「サノリゲン」を使用比較試験をなす。

1月6日

餌の漁獲測定をなす。白田被言のため作業室がなく室外での作業に困難を感ず、この仕事は漁業者には身近な仕事ではないが長い目で見て貰えれば大事な仕事だ。

17日

各地アサゲサノリの結果をまとめたところ、網簀・浮簀は順調であるがサノリは海水を除いて養育がよい。原因は皮肉辺りに発生しているはなすがり？。もしこれがためサノリを網簀・浮簀に切り替えらるれば結構だ。

19日

水産試験場復興計画書作成。書類は幾らでも作るから、よい場合に立派な建物を早く建てて貰って大いに背振のためにやりたいものだ。

×

×

×

その3

“製造部寸描”

藤田記

試験項目

概

要

① 経・調味付製造試験
並びに委託加工試験

自 12月 3日
至 1月 日

逐條施設の活用を計ると同時に生産コスト、並に工場管理について検討することを主旨とする。

12月3日以降業旨の委託製造が加わったので量的にその実をあげることが出来た。

時恰もあわただしい師走に前後し、みぞれ降る中もいとわず30名の女子工員さんたちは両腕をまくり上げ、冷たさをまぎらすために静かに口ずさむコーラスのリズムに乗って、仰くさまはたで見う喬まで、何となくほのほのとした気持ちにこれに勤労精神の極化として賛辞をうえたこと、幾度か引込れ、これら女子工員のたくましい勤勞により日産100%（4打入）と云う本場始って以来いまだかつてない生産能の新記録を樹立し得たのは特筆に価するし、又1日、約5〜600、又、水揚げ量の増加は反通膨価暴落の要目に合うところを該事業で（毎日多量と原料として処理するため）価値維持、市場経済に役立ったことも亦決して過言でない。

② 新包装魚製造試験

自 1月 6日
至 1月 18日

主 旨

而因本場長の提案によるもので原料魚は鰯（えう）、内臓の外すべて食べられ、缶詰同様、栄養に富み、相当期間安全性を持つように特別な包装法で、密着することを目的とした。

本試験に於て付簡を原料とし、内蔵除去的高温で、煮熟殺菌したものを包装紙（ポリエチレン紙）にて密封し製了した。果してこれは新製品として江湖に認められるか、どうかは今後の御覧に待つ外はないけれども、先づ今迄の経過から反省すると外觀はさて置き、味は非常に良く、缶詰品と同じ利用価値で美味を持つている。

包装は共にまだまだ研究を要するもので、やがて新製品として市場に運出する日を夢見て御覧一同聚切っている。又、これから生れようとする創造製品の名称は目下検討中であるが、そのうち良き名付親が現われて、時代感覚を盛った命名を希求している。

③ 可溶性蛋白質溶出試験

主 旨

魚を塩漬する時に魚体より溶出する蛋白質の量は塩の濃度（又脱塩可否）

色	月	月
三	月	未迄

溶出エキス分との炭素価を知るために、 γ とした。

本試験は続行中であるが、何方斯所を成に（？）の寄り集りで後部・横転、
珍豪：迷管何処迄続くと言ふ体である。

しかしながら何故ともあれ、旧でも早く皆さん方の良き善導となるべき資料を得る柳健斗中。

X

X

X

THE
LIFE OF
JOHN
BUTLER

※ 風穴は海軍部長より、安全に渡った。絹のハンカチーフで磨きかきような気がしてもつた。いい。「三つらの煙草」は正に満ち満ちて超えたしめすにはちのけではないが。今後とも水産廳を大いに聲援して、但し須賀港は絶対に何処にもお参りすることにする。

※ 創刊号が最終号になるのではないかと冷めされた。

「見て笑はれ」と云ふ代物ではないか「どうにかせう」と云う、かゝるまで心臓をこじ
 読けぬ。これを行ふときいふ所の試験も出たが、いさなり審判の中にほゞり、世なりもの
 にすべきであると思ふことに終着した。

剣闘号は街中の通りを疾に走く甲斐地であらうか。今迄亦試みしローカル 色澤
がなもののに上りて行きた。何が食料。

※ 芝居場へ行く時少くも「ハロ……」と声のきいた道の本場へのにぎやかなこと、その
賑わいの中に人を振るふの「リ」で、何處へ何處へせうかうろつこまわつても結局「生きた
もの」がそこらで、それをまた大層、その年の産物の海菜の下、魚貝の市場の中より
「これだ」と云ふものを探して来る。これの探求もまた生活としての大前提、さうは易し。
何々。

又木